

## 教育

10:29～10:56

座長：和出 弘章 （トヨタ記念病院 臨床検査科）

78. 動画による分析装置の簡易マニュアル導入へ向けた取り組み

井上 結以 藤田医科大学病院

79. 採血室における教育の取り組み

魚住 佑樹 JA 愛知厚生連 海南病院

80. 採血業務効率化と採血教育を目的とした採血支援システムの検討

三浦 那奈子 藤田医科大学ばんたね病院

◎井上 結以<sup>1)</sup>、齊藤 翠<sup>1)</sup>、星 雅人<sup>2)</sup>、伊藤 弘康<sup>2)</sup>  
藤田医科大学病院<sup>1)</sup>、藤田医科大学<sup>2)</sup>

#### 【背景・目的】

当院の夜勤体制は、検体検査に2名、輸血検査に1名、救命検査に1名が配置されている。夜間は限られた人員で運用するため、装置の操作習熟度や業務経験の差、また不慣れな対応に時間を要する場面や、心理的負担が生じていた。そこで本取り組みでは、これらの課題を軽減することを目的として、分析装置の操作マニュアルを音声および字幕付きの動画として作成し、その効果について検証を行った。

#### 【方法】

対象とした分析装置は、JCA-BM8040 GX、JCA-ZS050、Accuraseed SG720、GA-1172、HA-8190V、cobas pro e801、富士ドライケム NX10N とした。各装置について、直接装置に検体を搭載する際の手順や使用頻度の高い操作を中心に、音声および字幕付きの動画マニュアルを iMovie で作成した。作成した動画は検査室に設置している iPad から視聴可能とし、検体検査の夜勤に携わっている 24 名を対象に、使用前後のアンケートによる効果判定を行った。

#### 【結果】

動画マニュアルの利点として、操作手順が簡潔で業務中に気軽に確認できる点が挙げられた。また、音声および字幕を併用することで視覚・聴覚の両面から理解しやすく、実際の作業手順を動画で確認できることから、不慣れな装置でも操作時の安心感向上につながったとの評価が得られた。一方、改善点として、注意点などの解説を加えることで新人技師の理解が深まるとの意見があった。追加作成を希望する動画として、依頼頻度の少ない検体の前処理や一手間を要する操作手順に関する要望が認められた。

#### 【考察・まとめ】

音声および字幕を併用した動画マニュアルの導入により、装置の操作手順の理解促進や心理的負担の軽減につながったと考えられる。特に夜勤帯において、即時に操作内容を確認できる点は、限られた人員で運用する環境に適した支援の手段であることが示唆された。今後は注意点等を含めた内容の拡充により、教育ツールとしてのさらなる活用が期待される。

連絡先：0562-93-2305

## 採血室における教育の取り組み

◎魚住 佑樹<sup>1)</sup>、伊藤 直之<sup>1)</sup>、吉田 貴子<sup>1)</sup>、山本 由紀恵<sup>1)</sup>、北島 聖晃<sup>1)</sup>、山口 桂<sup>1)</sup>  
JA 愛知厚生連 海南病院<sup>1)</sup>

【はじめに】採血室における教育は採血手技以外に、接遇、検体搬送、物品管理、医療安全など多岐にわたる。しかし、教育担当者を専属で配置することは困難であるため、複数の担当者で教育を分担せざるを得ず、指導内容にばらつきが生じる可能性がある。そこで、教育の標準化を目的に、従来の複数項目をまとめた「一括形式」から、内容を細分化した「一問一答形式」へ変更し、採血手技以外の業務に関する約 380 項目の教育チェックリスト（以下一問一答リスト）を作成・導入した。本取り組みについて報告する。

【取り組み内容】①作成：2022 年 1 月より、一問一答リストの作成を開始した。②運用：2023 年 4 月に新人・復帰者向けに導入し、手順変更や不足箇所は随時追加した。③評価：2026 年 1 月に役職者・教育担当者・その他のスタッフを対象に、導入と運用に関するアンケートを実施した。

【アンケート結果】採血業務に携わる 39 名から回答を得た。①指導のばらつき：5 段階評価で「感じる（4 点以上）」14 名（35.9%）に対し、「感じない（2 点以下）」9 名（23.1%）であった。②教育方法の選好：教育担当者 9 名は一括形式

4 名（44.4%）、一問一答形式 5 名（55.6%）と分かれたが、その他のスタッフ 21 名では 15 名（71.4%）が一問一答形式を選択した。③運用評価：一問一答リストでの指導を受けたスタッフ 15 名のうち、項目数が多いと感じたスタッフは、導入前 11 名（73.3%）から導入後 2 名（15.4%）へと減少した。役職者 9 名のうち、6 名（66.7%）は導入を肯定的に評価した。④自由記述：安心感や教育の標準化など肯定的意見が多く、「不明点が明確になり質問しやすい」「具体的な場面設定により教育担当者に対応方法を共有できた」との声があった。一方、作成コストの壁や自部署では困難などの意見も散見された。

【考察】一問一答リストの作成は負担であるが、運用後は教育の標準化や安心感が評価され、指導のばらつき解消に有効であった。また、教育内容が明確で新人技師が疑問を言語化しやすく、教育担当者との共通理解に繋がった。一方で、他部署への運用拡大にあたり作成コストや実務適合性が課題であり、部署特性への配慮が求められる。

連絡先：0567-65-2511（内線：6312）

## 採血業務効率化と採血教育を目的とした採血支援システムの検討

◎三浦 那奈子<sup>1)</sup>、伊藤 保博<sup>1)</sup>、伊藤 摩耶<sup>1)</sup>、村松 美空<sup>1)</sup>、稲垣 沙弥香<sup>1)</sup>、中村 有見<sup>1)</sup>、神野 真司<sup>1)</sup>、杉浦 縁<sup>1)</sup>  
藤田医科大学ばんだね病院<sup>1)</sup>

【はじめに】採血業務は臨床検査技師にとって重要な業務の一つである。一方、経験の浅い技師では穿刺血管の判断に時間を要し、業務効率の低下や心理的負担が課題となっている。当院では 2025 年 9 月中旬より採血管準備装置の変更に伴い、採血支援システム RInCS（小林クリエイト株式会社）を導入した。本システムは、従来の患者認証機能に加え、採血後に穿刺部位や血管状態等を入力することで、次回採血時に過去の採血履歴を参照することが可能となった。今回我々は、本システム導入による採血業務効率化および採血教育への有用性について検討した。

【対象・方法】対象期間はシステム変更前（2025 年 8～9 月）および変更後 3 か月経過後（2026 年 1～2 月）とした。対象は当院で採血業務を担当する職員 35 名および採血業務 1 年目の 3 名（A、B、C）とした。評価項目は、患者認証から採血完了までの採血実施時間および 1 時間当たりの採血人数とし、変更前後で比較した。加えて、採血履歴参照による不安軽減効果についてアンケート調査を実施した。なお、抄録作成時点では 2 週間分のデータを用いた。

【結果】システム導入後、全体の採血実施時間は平均 3 分 03 秒から 3 分 00 秒と大きな変化は認められなかった。一方、1 年目では平均 3 分 23 秒から 2 分 57 秒へ短縮が認められた。1 時間当たりの採血人数は、A が 10 人から 16 人、B が 9 人から 13 人、C が 12 人から 17 人へ増加した。アンケート調査では、採血履歴参照の利用経験がある職員は全体の 25%であり、その内訳は「とても役に立った」25%、「少し役に立った」75%であった。1 年目職員 3 名中 2 名が採血履歴を利用しており、いずれも採血血管の選択および不安軽減に有用であったと回答した。

【まとめ】採血時間の短縮には経験の蓄積による影響も考えられるが、採血履歴を参照可能な採血支援システムの導入により、穿刺血管選択における判断支援が行われ、採血業務の効率化に寄与した可能性が示唆された。特に経験の浅い職員においては、心理的負担の軽減および採血教育の観点から有用であり、採血待ち時間の短縮を通じた患者サービス向上への貢献も期待される。

連絡先：052-323-5950